

オーストリア、ハンガリー

音楽と美術の旅

2023, 8, 15,

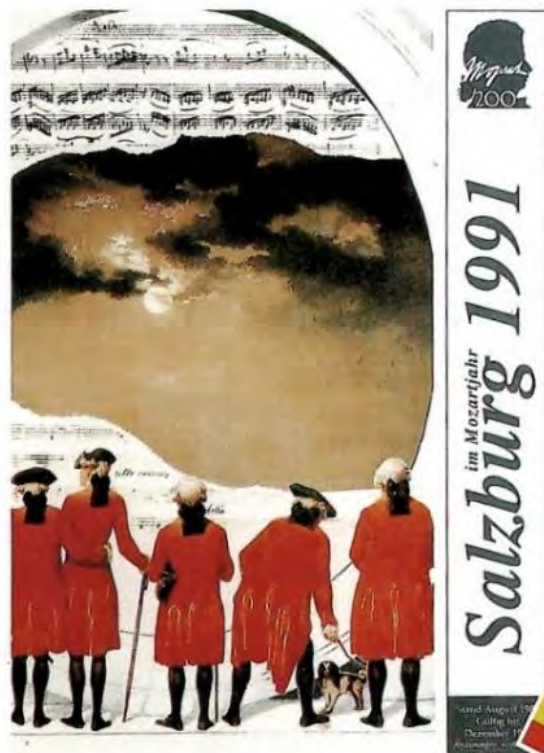
渡邊 晴雄

- 1, はじめに
- 2, オーストリアへの旅を刺激した映画
 - 1)、第三の男
 - 2)、アマデウス
 - 3)、サウンド オブ ミュージック
- 3, Mozart の生涯
 - 1)、神童の誕生と父の決断
 - 2)、モーツアルトの旅
 - 3)、王侯、貴族との関係
 - 4)、ウィーンでの成功と挫折
 - 5)、死 と『レクイエム』
- 4, 家族及び縁の深かった音楽家
- 5, 私の愛する Mozart 曲
- 6, オーストリア、ハンガリーへの旅
 - 1)、ザルツブルグ、ウィーンでの演奏会
 - 2)、ウィーンでの美術館
 - 3)、ザルツブルグ、ウィーン、ブダペストへの旅
- 7, あとがき
 - 1)、中島迪男氏のモーツアルト
 - 2)、ウィーンでの美術鑑賞と TAC
 - 3)、参考資料と書籍
 - 4)、感想



1 はじめに

- * コロナ禍により従来の活動が制約されて来た。そして自由時間が増えた。
私は、沢山旅をして来たので、旅行記を書き始めている。
自分で計画した旅では、3回 楽しさを味わう機会があると思っている。
① 旅の前の計画、 ② 旅の実行、 ③ 旅の回想(旅行記を書く)
“旅の回想“ については、古い旅を記憶だけに頼る事は困難である。
私の場合、写真、旅行計画の資料、家族への便り、等の記録が役に立っている。
- * 今回は、オーストリアを中心とする音楽と美術の旅 をテーマにした。
30年も前の旅だったが、ザルツブルグとウィーンは、必ず行きたいと思っていた所。
音楽で一番親しんできた作曲家は、モーツァルトだったし、ウィーンの美術史美術館
には、ブリューゲル、フエルメール等の名画がある。演奏会を楽しむ事も出来る。
仕事の合間を縫っての一人旅だった。
モーツァルトの音楽は、美しく、明るく、オシャレで、心地良く心を揺すってくれる。
旅をした1991年はモーツァルトの没後200年に一致していた。
- * この旅の旅行記を纏めようと思ったきっかけは、昨年10月にミューズの演奏会で聴いた
鈴木優人の指揮によるバッハ・コレギウム・ジャパン演奏の『レクイエム』だった。
期待以上に素晴らしい演奏で、再びモーツァルト熱に火がついた。



- * 一度だけ、ウィーンからの帰国に
オーストリアン航空を使った。
料理が美味しかった。



2, オーストリアへの旅を刺激した映画

オーストリアは華やかなイメージがあるが、世界大戦を2回経験しており、東西陣営対決の間で 暗さも残っていると感じた国だった。 そんな環境だけど、是非行きたいと思わせるように自分を刺激した 3本の映画があった。

1)、第三の男 1949 年

グレアム・グリーンが脚本を執筆。

光と影を効果的に用いた映像美。

戦争の影を背負った人々の姿を巧みに描き高く評価された。

アントン・カラスのツイッター演奏と オーソン・ウエルズの印象深い演技が光っていた。

英米仏ソによる分割占領下にある第2次世界大戦後のウィーンが舞台。

友人ハリーに呼ばれて来た作家マーチンスはハリーが自動車事故で死んだ事を知る。

やがてハリーは闇商人だったと聞かされて、その真偽を確かめようとする。

ハリーは偽ペニシリンの密売をしていたのだ。

二人はプラター公園の大観覧車の上で話し合ったが解決に至らず、ウィーン地下水道の中で撃合いとなり、ハリーは命を落とす。

ハリーの埋葬が中央墓地で行われた。

そこの並木道でマーチンスはハリーの恋人を見送っていたが、彼女は一顧だにせず無視して通り過ぎて行った。



2)、アマデウス 1984年

サリエリを中心にして見た、モーツアルトの物語。
モーツアルトは天才だけれど、軽薄な男として表現されている。

モーツアルトを愛している私には受け入れ
難い場面もあったが、626曲も名曲を作曲
した天才の一面を描いた物語として納得した。

サリエリは、皇帝ヨーゼフ2世にハプスブルグ
家の宮廷作曲家として仕えていた。

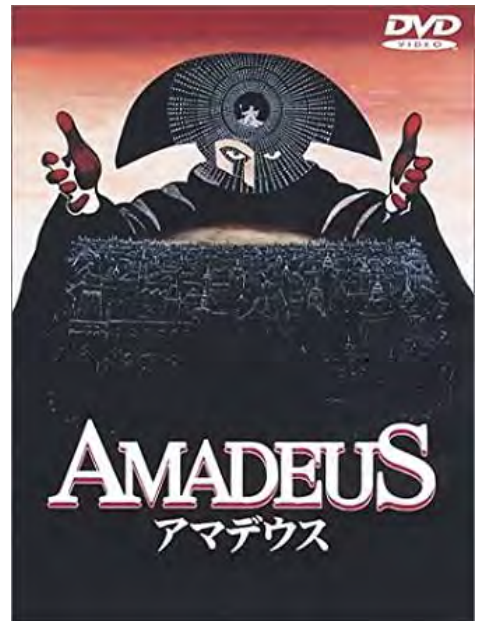
しかし、天才モーツアルトが現れたことで、
彼の人生は全て変わってしまった。

モーツアルトの音楽才能は、大衆から称賛
されるが、天真爛漫で礼儀知らずの人間性
は、他の作曲家からも反発、軽蔑されていた。

しかしサリエリだけは、『彼の才能が神の寵愛
を受ける唯一最高のものである事』を理解してしまう。

サリエリはモーツアルトの自筆譜を見て仰天した。とても信じられなかった。
それは神の声による響きなのだ。 彼は、激しい嫉妬に苛まれて苦悩する。

1823年11月のある夜、サリエリはウィーンで自殺を図り、精神病院へ運ばれた。
彼は『許してくれモーツアルト、君を殺したのは私だ！』 と言い続けていた。
このシーンでは、モーツアルトの交響曲25番が鳴り響いていた。



指揮するモーツアルト



サリエリ

3)、 サウンド ・ オブ ・ ミュージック 1965年

歌を愛する修道女マリアは、トラップ家の7人の子供達の家庭教師になる。

軍隊式規律が守られた厳格な家庭に戸惑うマリア。だが持ち前の明るさで、子供たちの心を開いていく。やがて大佐への愛に気づき、二人は結婚式を挙げる。

再び、明るい笑顔が戻ったトラップ一家。だがナチスの台頭に揺れる時代の波が一家にも襲いかかる。

大佐に召集令状が来たが、一家はスイスへ脱出することにする。

祝祭劇場で行われたコンクールで、『ドレミの歌』と『エーデル・ワイス』を歌う。

そして、『さようなら、ごきげんよう』を歌いながら、2～3人ずつ舞台から消えてゆく。トラップ一家の優勝が発表されたが、彼らは劇場から逃げ出していた。

第2次世界大戦前夜の実話をもとになっている

アメリカへ亡命したトラップ一家は、合唱団で成功する。



モーツアルト橋

子供たちは、この橋を渡りながら合唱していた。



ヴォルフガング湖

3, Mozart の生涯

1)、神童の誕生と父の決断

ヴォルフガング・アマディウス・モーツァルトは、1756, 1, 27 ザルツブルグで、音楽家の父レオナルドと母アンナ・マリアの7番目の子供として生まれた。然し成長したのは4才年上の姉ナンネルとヴォルフガングの2人だけだった。

神童の兆候は3才で現れた。父はナンネルにピアノ演奏の英才教育を行っていたが側にいたヴォルフガングは、瞬く間に音楽に通じて行き、5才の時には作曲を始めた。父は、神が息子に与え賜うた天賦の才を奇跡と受けとめ、息子の才能を伸ばす事を自分の音楽活動の中心にすることを決めた。

そして、小さなパトロンしかいないザルツブルグに限らず、広い世界への旅を通じて子供達の見聞を広め、音楽の知識を吸収させようと考えた。

またヨーロッパの王侯貴族に広く子供たちの力を知らしめたいという狙いも持っていた。当時は、著作権が定着しておらず、作曲家たちはパトロンの保護を受ける以外に食べていく方法はみつからなかった。

2)、モーツァルトの旅

旅は、1762年1月 6才の時に始まり生涯で18回の旅を経験した。

当時は悪路を、鉄枠車輪の馬車で走るため、揺れが激しく、車輪が破損して馬車から投げ出され怪我をする事もあったそうである。

モーツァルトは人生の約1/3を旅で過ごし、ヨーロッパを広く動き回った。

旅では色々の多くの人に会うことが出来たし、簡単に見る事の出来ないスコア等を見る機会も得られて、ほとんどのヨーロッパの音楽について学ぶことが出来た。

モーツァルトは、馬車の中でも作曲に励んだそうである。



旅の馬車



モーツァルトが旅をした主要都市

3)、王侯、貴族との関係

- * モーツアルトは1762年1月に父と姉の3人で行った ミュンヘン旅行が最初だった。バイエルン選帝侯マクシミリアン3世 の前で御前演奏を行って大評判となった。
- * その噂は早く広がり、1762年9月18日には ウィーンのシェーンブルン宮殿に女帝マリア・テレジアから招かれて、ピアノの御前演奏を行い大成功だった。



演奏の後、床に滑って転んだ。
同席の マリー・アントワネット
(2才年上)が起こしてくれたので、
『貴女は親切だ。後でお嫁さん
にしてあげる』
とモーツアルトが言ったという
エピソードがある。

- * 神童の頃モーツアルトは、ヨーロッパ中の君主や貴族たちから大変気に入られた。

モーツアルトはイタリア旅行でボローニアの
大理論家マルティーニから対位法を学んだ。
複雑な対位法や半音階パッセージを除いて
は全て頭の中で作曲出来ていた。
着実に、大作曲家としての力をつけていった。
然し、モーツアルトが、得たいと思っていた
楽長職のポストは、手に入らなかった。

モーツアルトは、人間関係をうまく作ることが
出来なかったし、マリー・テレジアから 息子の
トスカーナ大公へ “乞食一家を受け入れないよという手紙” が、出されていた。
“モーツアルトは女帝のピアノ教師よりピアノが上手かったから” という説もある。



パリでの演奏

4)、ウィーンでの成功と陰謀

- * ザルツブルグは、カトリック教会の大司教が統治する独立国だった。
そこで父もモーツアルトも宮廷での作曲、演奏を行っていたが、旅を許容してくれていた。
大司教が死亡し、後任として着任したコロレード伯は、理解の無い厳しい人だった。
広い世界を知り、パリ、ミラノ、ロンドン等で人気を博したモーツアルトにとって活躍の場
としてザルツ・ブルグは、存分に力を発揮できる場所では無かった。
コロレード伯にたいして不満を抱いていたが、折り合いがつかず決裂した。

- * 25 才になったモーツアルトは、ウイーンに移住し、一人立したフリーの音楽家として
・作曲した作品を売る、 ・予約演奏会を開催する、 ・弟子を取る(演奏指導)
 の活動を開始した。
- * ウイーンでは ウィーバー家に下宿したが、歌手の三女 コンスタンツェ と結婚した。
 父と姉の反対を押し切って、1782年8月4日、聖シュテファン寺院で式を挙げた。
 ウイーンでは予約演奏会に多くの客が集まり、オペラ『後宮からの逃走』も好評で
 絶頂期は約6年続いた。
- * 1785 年にはハイドンを自宅に招待し、『ハイドンセット』の 3 曲を演奏した。
 音楽の主流はイタリア オペラだったが、『フィガロの結婚』は 1786 年にブルク劇場で
 初演され大成功だった。
- * 1787 年 5 月に、父レオポルドが亡くなった。
- * ザルツブルグ大司教からは従僕として扱われていたモーツアルトだったが、皇帝、
 貴族の賛美を集めていた。 しかし、作品は暗い色彩を帯びてきた。
 後世の人は、深味のある傑作と考えるが、当時の人々は、そう受け止めなかった。
 モーツアルト人気は急速に衰え収入も減り始めた。 プラハで初演されて大人気
 だった『ドン・ジョバンニ』は、ウイーンでは大評判にならなかった。
- * サリエリ等、ウイーンの音楽家たちはモーツアルトの人気に対する嫉妬から、彼の活動を
 徹底的に妨害した。 オペラ上演が出来ないようにするあらゆる策略を巡らした。
- * 1791年、友人で ヴィーデン劇場の興行主だった シカネーダが、オペラ『魔笛』の
 作曲を依頼してきた。 妻が療養で出かけていたので、作曲の為の小屋も用意された。
 『魔笛』は9月30日、モーツアルト自身の指揮により 初演されたが、客の反応は非常に
 良かった。 シカネーダがパパゲーノを演じた。



魔笛の家



パパゲーノを演じた
シカネーダ

- * モーツアルトは収入が著しく減少した事から、経済的な
 問題に直面し、多くの借金をしなければならなくなった。
 当時は、著作権の制度が固まっていなかった。

あと10年も長生きしていれば、そんな苦労はしなくて
 済んだ筈である。

5)、 モーツアルトの死と『レクエム』

- * 灰色の服を着た謎めいた男が
依頼主の名を明かさぬまま
多額の手付金を支払い、死者の
ための鎮魂曲『レクエム』の
作曲を依頼して来た。



死の床のモーツアルト

その金は、モーツアルトにとって、神からの授かりもののように、有難かった。
温泉場で療養をしている妻 コンスタンツェの療養費と借金の高利が必要だった。

- * モーツアルトは死の床の中で作曲を続けたが、台本作家 ダ・ポンテ宛の手紙
の中で、次のようにレクエムの作曲を依頼して来た男について、書いていた。

『私の頭は混乱して、話をするのもやっとなのです。

人生は、何と楽しかった 事でしょう。

でも、人は自分の運命を変える事は出来ないのです。

摂理の望むことが行われるのを甘受しなければならないのです。

これは、私の葬送の歌です。 未完のまま残しておくわけにはいきません』

- * モーツアルトは、自分に、もう作品を書き続ける余力が残っていない事を悟り、
弟子のジェスマイヤーに、“死後残りをどう補うべきかを伝えた” と言われている。
モーツアルトは “レクエム” の 『ラグリモザ(涙ながらの日)』 第8小節まで
書き進んで、1791年、12月、5日、 午前1時に、35才で絶命した。

- * 12月6日午後、 聖シュテファン教会小聖堂で葬儀が行われた。
葬儀が終わった後、遺体は麻袋に入れられて、聖マルクスの無名墓地の大きな
墓穴に無造作に放りこまれた。この死後の取り扱いは、モーツアルトが極端に
経済的に追い詰められていたからかも知れないが、世界中から響きを買った。
現在、ウィーンもザルツブルグも、モーツアルトによる観光客からの収入で
潤っている。
- * それに引き換え、プラハ市民は、死後9日目に、盛大なミサで追悼した。
- * 『魔笛』の人気は広がり、他の曲も時間の経過とともに高まった。
死後10年経過し、モーツアルトの名声は、各国に拡がった。

4、Mozart の家族、及び関係の深かった音楽家

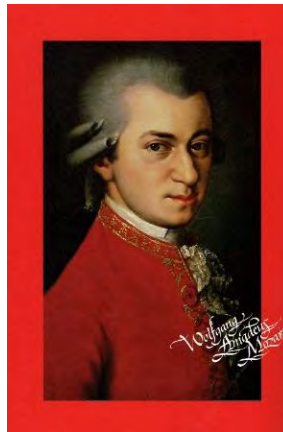
1)、モーツアルトの肖像画



◎ ピアノに向かうモーツアルト

ヨーゼフ・ランゲによる肖像画（1782年頃）

小林秀雄は、以前からこの絵を所有していた。



◎ 青年時代(1774年頃) のモーツアルト

バーバラ・クラフトにより死後
28年後に描かれた。



◎ 大礼服を着た 7才 のモーツアルト

大礼服はマリー・テレジア から下賜された。



◎ 黄金拍車十字勲章 を授けられた モーツアルト 1770年—17才



2)、 家族



モーツァルト24才時の一家 、 父レオポルド と姉ナンネル
肖像画は母マリアで、パリで 亡くなっていた。



妻 コンスタンツェ



遺児 ・ カール・トマス
・ フランツ・クサバー

3)、関係の深かった音楽家



① フランツ・ヨーゼフ・ハイドン

モーツアルトはハイドンを師と仰ぎ、数々影響を受けて成長した。年齢差は14才もあったが美しい友情で結ばれていた。

ハイドンへの尊敬を込めて作曲した四重奏曲はハイドンセットと呼ばれ、ハイドンに献呈された。

ハイドンはモーツアルトの父に対して、『誠実な人として神の前に誓って申し上げますがご子息は私が知っているもっとも偉大な作曲家です。』と伝えた。

ハイドンの1809年の葬儀で演奏された曲は、モーツアルトの『レクイエム』だった。

② ヨハン・セバスティアン・バッハ（大バッハ）



モーツアルトは、ヴァン・スヴィーテン男爵のサロンや大バッハの第5子ヨハンを通じて大バッハの教会音楽、バロック音楽を知り、夢中になって吸収した。

大バッハは、ケーテン宮廷の楽長の時に

- ・ ブランデンブルク協奏曲
 - ・ 無伴奏チェロ組曲
- 等の名曲を作曲した。



ヨハン・クリスチアン・バッハ

③ ベートーベン



ベートーベン は 1770 年に生まれた。

モーツアルトとは14才の年齢差だった。

ベートーベン は 16 才の時の 1787 年 4 月に、ウィーンのモーツアルトの家を訪ねた。

この時、モーツアルトは、少年のクラヴィーアでの即興演奏を聴いて、

『この少年は将来きっと大成する』と述べたというエピソードが伝えられている。

5、特に好きな Mozart 曲

① 交響曲40番 ト短調 K550

私が一番多く聴いたモーツアルトの曲は、多分これだろう。学生時代に買ったB.ワルター 盤を摺減るほど聴いていた。

非常に演奏の難しい作品と言われており、第一楽章の冒頭の部分の表現を理解させるために、トスカニーニは“絹のハンカチをひらひらと落とし”、このように演奏して欲しいと言ったそうである。

小林秀雄の著作『モーツアルト』は、音楽を文学で表現した名作で、モーツアルト・ブームを作り出した。モーツアルト・ファンが一挙に20%以上増加したそうである。然しそれに対する反論もあり、未だ論争が続いているようだ。

小林は「疾走する悲しさ」とK550を定義した。

同じ短調の 交響曲25番 も好きな曲である。



② ピアノ協奏曲20番 ニ短調 K466

1785年皇帝臨席の演奏会で、発表された。前日に完成したばかりで写譜が間に合わず、暗譜状態の演奏だった。皇帝が

『ブラボー、モーツアルト！』
と叫んだという。

私は、内田光子のモーツアルトが好きだ。ロンドンへ出張していた時、内田光子の演奏会があった。

然し演奏会の夜、帰国しなければならなくなり、演奏会に行けなかった。今でも残念に思っている。



③ フルートとハープのための協奏曲 ハ長調 K299

パリ時代に ド・ギーヌ伯爵と知り合いになり、依頼されて作曲した。

伯爵はフルートを、令嬢はハープの演奏が出来た。

当時の社交界の優雅さと気品の高さがよく表現されている。

何回も、何回も、楽しんだ曲である。

吉野直子の演奏会を聴いた記憶がある。



④ クラリネット協奏曲 イ長調 K581

クラリネット奏者 アントン・シュタッドラー

のため、亡くなる2ヶ月前に作曲した。

シュタッドラーはモーツアルトの音楽を

愛しており、彼に『何故そんなに完璧な曲が作れるのか?』と聞いたほどだった。

“ 悲しくて、切なくて、比類なく美しく、
優しく、温かい。”

⑤ ティベルトメント ニ長調 K136



3 回目のイタリア旅行の直後、16歳の時に
作曲された。

イタリアの太陽を思わせるような、明るい作品。

斎藤秀雄の直弟子だった小沢征爾が、
好んで演奏していた曲だった。

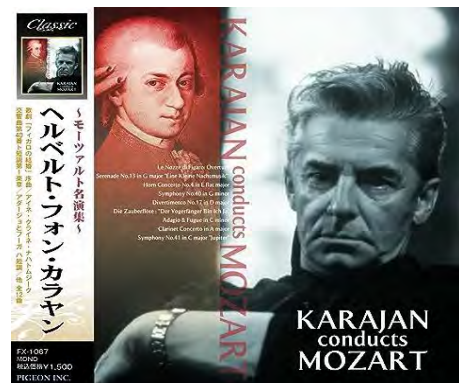
⑥、 アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク

最も有名な曲。

私が最初に聴いたモーツアルトは、
多分この曲だったと思う。

小学校で、先生が聞かせてくれた。

気品があり、分かりやすい名曲である。

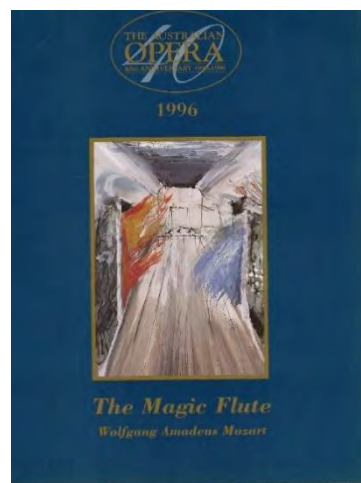


⑦、魔笛 K620

1791年の春、ヴィーデン劇場の支配人シカネーダの依頼により作曲された。
ウィーンのフリーメーソン結社と『魔笛』は、何らかの関わりを持っていたようだ。
モーツァルトもシカネーダもフリーメーソンの会員だった。

◎ 私は、1996年に家族旅行(妻、義母、義姉、)でオーストラリアへ行った。
その時、シドニーのオペラハウスでの『魔笛』上演 にスケジュールを
合わせて鑑賞することが出来た。

オペラ には余り深い知識を持っていなかった
けど、楽しんだ記憶が残っている。



David Hobson — Tamino
Kathryn MaCusker — Pamina
1995

⑧、レクイエム

* 最初に聴いていたのは、ワルターのモノラル盤

* 昨年 10 月の鈴木優人指揮による演奏会は、とても良かった。

* モーツァルトはこの曲を自分で完成させられずに、亡くなってしまったが、
モーツァルトの最高傑作だと、私は思っている。

BACH JAPAN バッハ・コレギウム・ジャパン

モーツァルト **レクイエム**

モーツァルト
交響曲第39番 変ホ長調 KV 543
レクイエム ニ短調 KV 626

鈴木優人 [指揮]

バッハ・コレギウム・ジャパン「合唱・管弦楽」

新 高井[ソプラノ] 高木 大貴[アルト] 横田 高[テノール] トニエリ・ワグネル [バス]

2022年 10月28日(金) 18:15開場 19:00開演 所沢市民文化センター ミューズ アークホール
Tokyo, Friday 28th October 2022 at Tokorozawa Civic Cultural Centre MUSE

【料金】全席指定 S席 6,000円 A席 5,000円 学生席 (25歳以下) 3,000円
【オンラインチケット】S席 5,000円 A席 4,000円

チケット発売日: 10月28日(土) 一般: 10月1日(土)

TEL.04-2998-7777

インターネット予約 24時間購入できます!

会員募集集中! 年会費2,000円 入会無料



モーツァルトの《レクイエム》パート譜初版

ウィーン、ヘーミッシェ・ドゥルツケライ社、1812年

W.A. Mozart: Requiem. Erstausgabe in Stimmen, Chemische Druckerey, Wien, 1812.

6, ザルツブルグ、ウーンでの演奏会

①、ミラベル宮殿での演奏会

遂に、ザルツブルグ、ミラベル宮殿での
コンサートを1月12日20.00～に聴くことが出来た。
演奏されたモーツァルトの曲は
弦楽四重奏曲ハ長調 K157
だったそうだが、何も覚えていない。



ミラベル宮殿の美しい庭



SALZBURG 1991



PROGRAMM

GEORG FRIEDRICH HÄNDEL
(1685–1759)

Contraalto grosso in D-Dur, op. 6 Nr. 5

Larghetto e staccato

Allegro

Presto

Largo

Allegro

Menuet (un poco Larghetto)

PETER ILJITSCH TSCHAIKOWSKY
(1840–1893)

Elegie aus der Serenade für Streicher

PAUSE

GEORG FRIEDRICH TELEMANN
(1681–1767)

Konzert für Viola, Streicher und Basso continuo in G-Dur

Largo

Allegro

Andante

Presto

Solist: Dietrich Cramer

WOLFGANG AMADEUS MOZART
(1756–1791)

Streichquartett in C-Dur, KV 157
(Orchesterfassung)

Allegro

Andante

Presto

②、 楽友協会ホールでの演奏会

毎年元旦に、NHK TV 番組で、ニューイヤー・コンサートが放映される。

そのコンサートはウィーンの楽友協会ホールで行われる。

ここは一度行きたかったところだった。

ウィーンのコンチネンタル・ホテルに宿泊した時、ウィーン・フィルの演奏会は開かれていなかった。

然しホテルのマネージャーは、

“学生の演奏会が行われますので、それを聴かれたらどうですか？”と勧めてくれた。

どんな曲を演奏したかは 忘れてしまったが、ここの大ホールの内装はすべて木造りで世界でもっとも音響が良いとされている。

コンサート・ホールで演奏が聴けて、

満足した。

シャンデリアは特別、美しかった。

このホールのパイプオルガンと
所沢市のミューズに設置されている
オルガンのメーカーは、同じ
リーガー社だそうである。



7、ウィーンの美術館

ウィーンには、権勢を誇ったハプスブルグ家が600年にわたって収集した数十万点の美術品が集められている。特に関心の高かった絵画を中心に見て回った。

①、ウィーン自然史美術館

時の皇帝ヨーゼフ一世は、時間的、金銭的制約を一切受けず宮殿のような美術館を建設した。贅をつくした建築は、来場者を圧倒する。



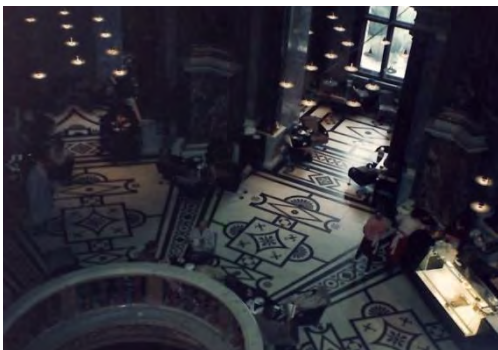
自然史美術館



中央階段ホール

私がこの美術館で、一番見たかった絵画は、質、量とも世界一を誇る
ブリューゲル作品群だった。

ここへ来る前に、ブラッセル美術館でブリューゲルを見ていたが、そこでの作品数は
4点に限られていた。



* ウィーンのカフェは、優雅で静かで心安らぐ
場である。

特に美術館の喫茶室は素晴らしく、コーヒー
とケーキはとても美味しかった。

贅沢な時を過ごせた記憶がある。

◎ ピーター・ブリューゲル

この美術館は、ブリューゲルの作品12点を所蔵している。(世界最大)



『雪中の狩人』

雪深い冬の情景から、豊かな詩情が伝わってくる傑作である。

凍りついたような景色の中で、人間の営む生の温もりが感じられる。

『農民の結婚式』

酒を飲み、音楽に興じるのは婚礼の祝いに集まった人々。

ドイツのハノーバーの近くで、この絵と同じスタイルのサービスをしているレストランへ招かれた事があった。



『バベルの塔』

この絵画は2017年4月に東京都美術館で展示された絵とは異なるが、いずれも精緻極まりない細部描写と謎めいた暗示性により、比類ない傑作とされている。

◎ フェルメール 『画家のアトリエ』

謎の画家の最高傑作とも言われている。
フェルメールは、“画家という仕事は誇り高いものであること”を示したくてこの絵を描いた。
フランスの侵攻以来、オランダの経済も家計も苦しくなったが、フェルメールはプライドを込めて描いたこの作品を、手離さなかった。
フェルメールの死後、妻カテリーナも他人の手に渡ることを防ごうとした。



◎ ラファエロ 『草原の聖母』

1504年、23才の時の作品である。
聖母マリアと幼いキリスト、洗礼者ヨハネも姿を描いている。
伏し目がちで、口元にかすかな微笑を漂わせている 聖母マリアの美しい顔からは、静かな幸福感と悲しみが感じられる。



◎ ベラスケス

『青いドレスのマルガリータ王女』

マドリッドのハプスブルグ家から
“ お見合い写真として送られた。”

②、オーストリア美術館

19世紀末～20世紀初のウィーンの名画を集める ベルヴェデーレ宮殿



◎ クリムト 『接吻』

“永遠の瞬間”を描いた愛の賛歌

1908年、46才の時の代表作である。

「分離派」を結成し、アカデミズムに反旗を翻し独自の官能美を追求し始めた。

『接吻』は発表と同時に政府に買い上げられた。

クリムトが「ウィーン世紀末」の代弁者であることを万人が認めた一枚でもある。



◎ エゴン・シーレ 『母と子供』

寝れながらも子供を膝に抱く母の姿に、母への思いが凝縮されている。

- ・ シーレは美術教師のすすめで、ウィーン工芸美術学校に数枚の素描を提出した。それが高く評価され、ウィーン美術アカデミーへ行くよう助言された。そしてアカデミーに合格した。

- * ヒトラーは、画家になる事を目指してウィーン美術アカデミーを2回受験したが、いずれも失敗した。もし、合格していたら、世界の歴史が変わっていただろう。

8、ザルツブルグ、ウィーン、ブダペストの旅

ヨーロッパへ仕事で足しげく行っていた頃、時間を捻出してオーストリアへ3回旅をした。何れも行き当たりばったりの一人旅で、時期はモーツアルト没後200年に一致していた。ザルツブルグとウィーンは、行きたかった所だった。

ハンガリーのブダペストは、ウィーンで宿泊したインター コンチネンタル ホテル の日本人スタッフが “必ず行ける保証は無いけれど” という条件で勧めてくれた旅の計画 だった。

当時は、ベルリンの壁崩壊から未だ充分な年月が経過していなかった。

ウィーンは東西ヨーロッパの接点だったが、スタッフは、

“日によって、又ハンガリーの入国審査官の気分によって入国が決る”
状況だ と言っていた。

結果としては入国出来て一日、ブダペストを楽しむことが出来た。

◎ 3 回の旅の内訳

	主な旅行先		注
・最初の旅 (1991、1、)	・ザルツブルグ	・ ミラベル宮殿 ・ ホーヘンザルツブルグ城 ・ ザルツカンマーグート	** London—Wien—Tokyo Hotel Europe コンサートは1, 12日20, 00～ バス・ツアー
	・ウィーン	・ 市内 散歩 ・ シュテフアン寺院 ・ 市立公園 ・ マルクス霊園	
・2回目の旅 (1991、8)	・ザルツブルグ	・ ヘルブルン宮殿 ・ 市内	** Munhen—Zartzburgue ミュンヘンから電車で日帰り
・3回目の旅 (1992、3)	・ウィーン	・ 自然史美術館 ・ オーストリア美術館 ・ Ring 散策	* London-Wien Tront Hotel Inter Continental
	・ブダペスト	・ 漁師の砦等 市内見物 ・ レストラン “チャルグ”	専用車でのツアー(3 名乗車)

1)、ザルツブルグ

ザルツブルグは“塩の城”という意味でかつては、岩塩の産出で富み栄えた。最も早くローマ文化とキリスト教の洗礼を受けた。

街の中央をザルツアッハ川が流れ、多くの寺院と美しい建物が調和して点在している美しい街である。

モーツァルトを生んだ音楽の都として世界中に知られている。

郊外には、ザルツ・カンマーグートの美しい自然が広がっている。



ザルツブルグ観光の初日は、曇りが降り、寒い一日だった。



ホーヘン・ザルツブルグ城より街を望む



城の屋上にて



馬の足洗い場



モーツアルト広場



モーツアルトの生家

◎ 天気が悪かったが、観光バスでザルツカンマーグートを回避した。



雪のザルツ・カンマーグート



バイオリンを弾くモーツアルト



ゲトライデカッセ

◎ ミュンヘンで一日、自由な時間が取れた。

迷わず再びザルツブルグへ行った。ヘルブルン宮殿を見たかったし、市内の散策もしたかった。

タクシーが遅れて来たので切符を買う時間が無くなり、美人の車掌さんに「車内で清算するから」と叫んで、電車に飛び乗った。2時間位の距離。

車窓から見る眺めは、とても美しかった。モーツアルトが馬車で何回も走った道筋だった。

車内でパンとコーヒーの朝食を取った。



* ヘルブルン宮殿、水の庭園

奇想天外な仕掛けの噴水が沢山あり、突然噴き出して、人々を驚かす。

遊び心に溢れていた。



突然王冠が吹き上げられた。



晴れた日のホーエンザルツブルグ城

2), ウィーン

ハプスブルグ家の栄華が薫る

歴史地区を駆け足で回った。

ウィーンは、文化があふれている街で、
ゆっくり観光をしたかった。



美術史美術館とマリア・テレジア像



シュテファン大聖堂



ブルク庭園のモーツァルト像



Ring を走る馬車



ペスト記念柱

17世紀後半に猛威をふるったペストの
終息を記念して、建立された。

◎ 市立公園と中央/マルクス墓地
観光の時間が充分取れなかったので、
特別のタクシー手配を依頼した。
『英語が話せるドライバーで市立公園と
マルクス墓地を、空港へ行く前に案内
して欲しいのだが？』

希望通りドライバーは、親切に案内してくれた。



ヨハン・シュトラウス



ベートーベン



シューベルト



ブラームス



中央墓地の
モーツアルト記念碑



サント・マルクス墓地のモーツアルト碑
モーツアルトの遺体は共同の墓穴に投げ込まれたが
正確な場所は解かっている。
折れた円柱を前に、天才の死を嘆く天使が佇んでいる。
—— この写真だけは、是非とも撮りたかった——

3)、ブダペスト

Royal Tour 社の ハンガリー ツアー では、社長のマンフレッドが運転を兼任。



私の他には、三和銀行 Dusseldorf の K 氏 夫妻 が参加した。
マンフレッドさんは日本に来た事があり、話が弾んだ。



漁師の砦



国会議事堂



ブダ(山の手)とペスト(下町)を結ぶ鎖橋

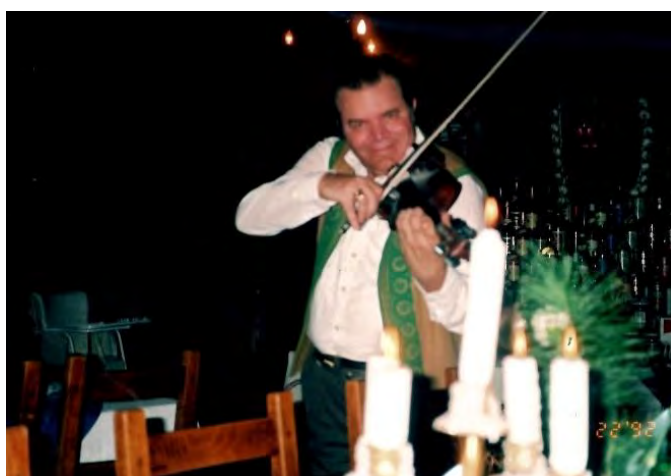




◎ フランツ・リスト記念館

1822年12月、ウィーンの演奏会場でリスト(11才)の演奏を聴き、ベートーベン「素晴らしい演奏だった!」と褒めた。ある新聞は、『新たなモーツアルトが現れた』と伝えた。ハンガリー狂詩曲は74才の時に完成させた。
“ラ・カンパネラ” は フジコ・ヘミング のレパートリーで人気がある。
時間に余裕が無く、記念館を外から見ただけ。

◎ ウィーンへの帰り道、ハンガリー レストランの“チルダ”で夕食



“チルダ”では、昼は普通の仕事をし、夜には客に素晴らしい音楽を聴かせてくれるバイオリニストと道化がいて、楽しませてくれた。

バイオリニストのレパートリーは、ジプシー音楽だそうだが、チゴイネル・ワイゼン、黒い瞳、等を聴かせてくれて、リクエストにも応じてくれた。

ジプシー音楽の響きは凄かった。

夕食には、真っ赤なパプリカが沢山入った鯉のスープが出た。美味しかった。



7. あとがき

1). 中島迪男氏(シチズン時計元社長)とモーツァルト

中島元社長は当時、新規事業の拡大を促進していた。

私はシチズンで中島社長の時代に、産業用プリンタとPCプリンタの事業に従事していた。

当時、日本の経済は絶好調で『Japan as NO.1』と持てはやされていた。

今とは異なり、大変な円高(\$1= 約¥90)で海外からアンチダンピング法適用の対象になっていた。

急速に拡大したPC市場の中で世界規模での競争を展開する事は、多方面で発生するあらゆる問題の同時解決が必要となり決して容易な事では無かった。

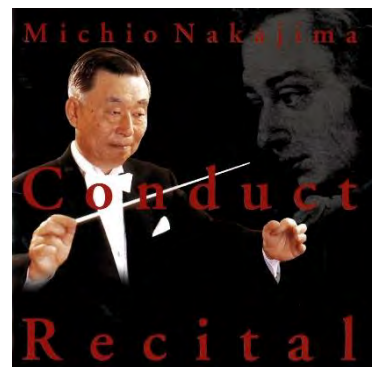
産業用プリンタは、伊藤忠商事とのジョイント・ワークだったが、PCプリンタはシチズン独自の事業展開だった。

PCプリンタでの私の守備範囲は、商品企画、アジア・オーストラリアでの販売、貿易摩擦対策 等だった。

一時は瞬間風速だがPCプリンタで、世界マーケットシェアの3位を占めた事もあった。色々の事が有ったが、今では懐かしく思い出される。

プリンタ会議では、いつも中島社長と色々の案件と対策につき話し合っていた。

私は、56才の時にシチズンを退職し、アメリカの会社に転職した。



中島元社長は、2006年8月11日、80才で亡くなられた。

9月27日に行われた“お別れの会”で、私は始めて中島元社長が音楽への造詣が深く、下記のように交響楽団の指揮を行われていた事を知って驚いた。

特にモーツァルトを好まれていたようで、ご生存中にモーツァルト談義をしたかったと思っている。

◎ 中島迪男氏の音楽指揮活動 —— 会場は全て、カザルスホール

① 1994, 7, 10 モーツァルト 交響曲第41番 ハ長調 『ジュピター』 K551

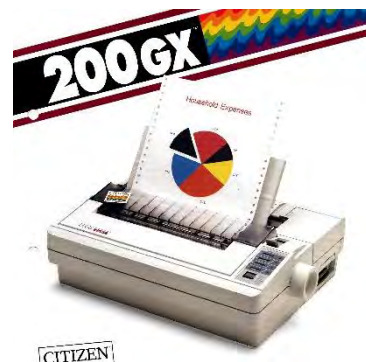
② 1997, 9, 30 モーツァルト ピアノ協奏曲第23番 イ長調 K488

③ 2000, 9, 18 モーツァルト 交響曲第40番 ト短調 K550

モーツァルト以外にハイドン、ベートーベンの曲の

指揮も行われていた。

経営者であるとともに音楽を愛された文化人だった。





3)、 参考資料と書籍

今回の旅行記では、音楽と絵画 に関する事が主体を占めた。

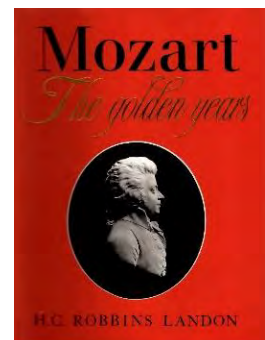
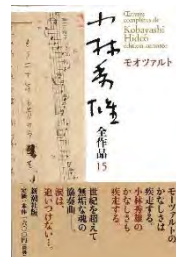
特に モーツアルト についてこれまで知識が少なかった事を認識して、沢山本を読んだ。
時間を使ったけど、楽しかった。

◎ 参考資料(自分が書いたもの)

- ① TAC 学習資料 “Peter Brugel の 世界” (Power Point)
- ② “おすすめの一冊 ”小林秀雄著 モーツアルト” —T 倶楽部“広場”に掲載

◎ 参考にした主要書籍

- ① 新モーツアルト考 海老沢 敏 日本放送出版協会
- ② モーツアルト事典 冬樹社
- ③ Mozart The Golden Years H.C Robbins Landon
- ④ モーツアルト ミシェル・パルティ/海老沢敏監修 創元社
- ⑤ モーツアルトをめぐる人たち 石井清司 ヤマハ ミュージック
- ⑥ モーツアルト 天才の秘密 中野 雄 文芸春秋
- ⑦ モーツアルト 名曲名盤 101 石井 宏 他 音楽之友社
- ⑧ モーツアルトの旅 ウィーン/ザルツブルグ 海老沢 敏 音楽の友社
- ⑨ ハプスブルク物語 池内 紀 新潮社
- ⑩ ヨーロッパの美術館 田辺 徹 美術出版社
- ⑪ 中央の復活 加藤雅彦 日本放送協会
- ⑫ モーツ アルトを求めて 吉田 秀和 白水社



4)、 感想

- * 旅行記を書き進めるにつれて、知識の少なさを認識し読書は増えたが、楽しかった。
- * モーツアルトは、父へ状況を詳しく知らせるために手紙を沢山書いていた。
没後200年を越えて、未だモーツアルト研究が進んでいるようだが、それには
手紙が大きな役割をはたしている事を理解した。
- * 多くの知識人が モーツアルトについてコメントしている。心に響いたのは、
大物理学者のアインシュタイン博士の次の言葉
『私にとって“死”とは、モーツアルトが聴けなくなることです。』
未だ聴いていない曲は、なるべく聞くようにしたい。

以上